実践編　第３学年 Let’s Try! 1 Unit 7 This is for you.

オリジナルグリーティングカードで
もっとなかよくなろう！

授業者　福永　真紀子

１　本実践の教材について

本単元では、欲しいもの色や形、大きさについて“What do you want?” “---please.” “Here you are.” “Thank you.”などの表現を使って尋ねたり答えたりして伝え合う活動を通して、それらの表現に慣れ親しむことをねらいとしている。

副教材で提示してある単元の流れは、副教材の挿絵を見て色や形の表現に慣れ親しんだり世界にはさまざまな「グリーティングカード」があることを知ったりし、色や形を使ったカードを作って友達に送るというものである。この単元の流れでも色や形の表現に慣れ親しむことはできるが、その活動内容を工夫することで、何度も何度も繰り返し欲しいものを尋ねたり答えたりして存分に伝え合うことや、完成させたカードに対する相手意識・目的意識、また、作った喜び、もらった嬉しさなどの子どもの思いはもっと高められると考える。

「グリーティングカード」は各国によって様々な文化や習慣があるが、一般的に感謝の気持ちを伝えたり、年中行事の挨拶をするときに用いられたりするものである。ここで言うオリジナルグリーティングカードは、副教材に提示してあるもののうち、自分が渡したい相手や渡したいカードを選んで作ることとする。また、今回は学級の友達ともより関わってほしいという願いから、クラスメートも渡す相手に加えることとした。このオリジナルグリーティングカードを作っていくにあたり、子どもたちは前単元で行ったアルファベットショップのように「形ショップ」を一人１店舗出店する活動を設定する。この形ショップには、様々な大きさや色、形のステッカーを用意しておく。アルファベットショップでは主に“Do you have a ---?” “Yes, I do. / No, I don’t.”といった、客の立場から始まるやり取りを経験してきている。店員と客になりきってやり取りをする活動は前単元と同じであるが、本単元では“What do you want?” と店の立場からのやり取りで始まるため、友達が欲しがっているステッカーを考えたり、客が欲しい色や形のステッカーがなくとも “How about ---?” と客側に提案したりと、子どもたち同士が試行錯誤しながら活動に取り組むことができる。

また、前単元のアルファベットショップではあらかじめ教師が用意しておいたアルファベットステッカーを使用したが、今回は友達が欲しがっているものや、それぞれのグリーティングカードに使えそうなステッカーに子どもたち自らが書き込んで出店する店の在庫として用意する。そうすることで、準備をしている段階から「友達がカードのデザインに使えそうな大きさや色、形」という相手意識も高まると考える。

単元の終盤では“This is for you.” “Thank you.”という表現を使ってカードを渡し合ったり「こんなカードを作ってみたよ」と紹介し合ったりする時間を設ける。そこで使った大きさや色、形を伝え合ったり「このステッカーはあの友達が作ったよ」と色や形を共有したりすることも、コミュニケーションをたのしむという上では大切な活動であると考える。単元全体を通して、子どもたち同士が互いのことをより大切にし合ったり、思い合ったりすることで、学級の仲ももっと深まるのではないかと考え、この単元を設定した。

２　単元の構想

今回の実践では、次の２点をポイントとして単元を構成する。

○　単元序盤でメッセージカードや葉書などをもらった経験を出し合わせたり、世界のグリーティングカードを紹介したりすることで、外国の文化と日本の習慣の共通点・相違点に気付かせ、グリーティングカードに対して興味・関心を高めることができるようにする。
○　自分や友達が描いた色や形のステッカーを、欲しいものを尋ねたり答えたりする表現を使いながら繰り返しやり取りをし、集めていくことで、相手が作りたいグリーティングカードに合わせて大きさ・色・形を提案することができるようにする。

３　研究の視点に沿った具体的取り組み

⑴　相手や目的を意識してコミュニケーションを図りたくなる題材と課題設定の在り方

単元の導入では、日本の暑中見舞いや寒中見舞いなどの、年中行事でやり取りされるものを日常の中から想起させたり、手紙やメッセージカードをもらった経験を出し合わせたりすることで、日本の文化や習慣に目を向けることができるようにする。その後、世界でよく使われているグリーティングカードをALTから紹介する場面を設定することで、日本と外国の文化や習慣の共通点・相違点に気付くことができるようにする。そして、子どもたちのグリーティングカードへの興味・関心が高まったときに「誰かのために渡すオリジナルグリーティングカードを作る」という目的を共有する。グリーティングカードを作る過程で、前単元で行った店員と客の立場と同じように、グリーティングカードに必要な大きさ・色・形の材料を集めていくことができるようにする。欲しいものを尋ねたり答えたりする表現や、大きさ・色・形の表現を学んでいく中で、単元の初め、そして単元の途中でも常に、誰のためにどんな思いでグリーティングカードを作っていくのかを、相手や目的を子どもたちとともに話し合ったり、確認したりしながら活動を進めていく。

⑵　見方・考え方を働かせ、対話を通してよりよいコミュニケーションを行うための手立て

本時では、欲しい大きさや色、形を相手に伝えることが難しかったり、伝わらなかったりした際に、伝え方を工夫する子どもの姿、さらに“How about---?” と自分が用意している色や形のステッカーを提案する子どもの姿を目指したい。そのために、単元の序盤や出店準備の時間などに、大きさ・色・形の特徴をまとめたものや、欲しいものを尋ねたり答えたりする表現をまとめたものを教室に掲示しておき、いつでも見返すことができるようにする。子どもたちはそれを見ながら、自分が相手のために作っているオリジナルグリーティングカードで必要な大きさ・色・形の材料を探すやり取りを行う際の手がかりとしたり、友達から尋ねられたときに見返したりすることできるような環境を整備する。

⑶　学習内容と思考過程を自覚し、よりよいコミュニケーションに向かうための手立て

毎時間の振り返りでは、メタ的な振り返りと学習への動機付けを促すために、次の２つの工夫を行う。１つ目は、言語活動の後に、自他の表現の工夫やよさに気付く立ち止まりである。本単元では欲しい大きさ・色・形が相手に伝わらなかったときには「こんなときどうやったら伝わる？」と問い返したり、客側から欲しいと言われたものがなかったときには「この色はないけどこれならどう？と提案してみたとき、お客さんはどんな反応だった？」と問い返したりする。子どもたちがどうにかして互いに伝え合おうとしている様子を全体で共有することで、コミュニケーションの工夫やよさに気付くことができるようにする。２つ目は、授業終末の記述による振り返りである。何に気を付けて英語表現を使いながらやり取りをしたのか、気付いたことで変わったやり取りや表現があったかなど、思考過程を振り返ることで、よりよいコミュニケーションの在り方を自覚して人と関わっていく力を育む。